

藤井永観文庫所蔵 相覚撰・聖通伝領「古口決抄鈔出」について

大田 壮一郎(立命館大学文学部 教授)
E-mail ontas@fc.ritsumei.ac.jp

はじめに

ここに紹介する「古口決抄鈔出」(以下、本書)は、藤井永観文庫所蔵の典籍であり、現所蔵者の立命館大学アート・リサーチセンターにより藤井永観文庫研究資源データベース(<https://www.dh-jic.net/db1/resource/search/eikan.php>)において画像が公開されている(資料番号: [eik2-0-36](#))。以下、断りのない番号は藤井永観文庫研究資源データベースの資料番号を指す。なお、書名の「古口決抄鈔出」は、原題ではなく奥書を踏まえた後勘と考えられ、それ自体の検討を要するが、参照の用に鑑み、先ず現状の書名に従う。

1 書誌情報

まず、書誌情報を整理しておく。本書は上・下二冊の冊子で構成され帙に収納されている(図1、2)。楮紙。全紙に裏打ち。本文は一筆の漢字カナ交じり文で、全編にわたり朱合点、墨消や挿入点による追記(墨書・朱墨)あり。無辺無界で一面は10行・20字前後である。各冊個別の書誌情報については以下の通り。なお、数値等は著者の原本調査に基づくものであり、藤井永観文庫研究資源データベースの記載とは必ずしも一致しないことを断っておく。

〔上冊〕…寸法:縦25.3 糎・横21.0 糎・厚1.5 糎／丁数:41丁(共紙表紙)／装幀:袋綴(紙縫綴)／表紙:野紙。小破損。綴じ部分に補強紙の跡。表紙右下に墨書「聖通

之」(外題とは異筆)。表紙右下にラベル(3 A / 67 / 1)貼付。／外題:表紙打付書「鈔出上」。

奥書:裏表紙見返しに奥書あり。

〔奥書1〕於上西浄光坊令鈔出畢、文字等不審多々也、然レトモ先如本令書之、

○不_可○外見也、金剛仏子相覚廿一歳」

〔奥書2〕堅固金剛仏子聖通廿一

〔下冊〕…寸法:縦25.3 糎・横21.0 糎・厚1.5 糎／丁数:45丁(共紙表紙)／装幀:袋綴(紙縫綴)／表紙:野紙。小破損。綴じ部分に補強紙の跡。表紙右下に墨書「聖通之」(外題とは異筆)。表紙右下にラベル(3 A / 67 / 2)貼付。／外題:表紙打付書「鈔出下」。

奥書:裏表紙見返しに奥書あり。

〔奥書1〕此鈔出二帖者、応安五年黄鐘之比、於上西浄光坊、自他流之古口決抄等開見、小々令鈔出者也、当流用否者、逢師可決之歟、更不可及他見者也、金剛仏子相覚廿一歳」

〔奥書2〕伝領金剛仏子聖通廿一

併せて帙についても記載しておく。寸法:縦25.5 糎・横22.0 糎・厚2.5 糎／装幀:青紙／表面:題箋墨書「東寺本 鈔出 上下二帖 応安五年 相覚」、押紙「永観文庫時代 応安五年 名称 鈔出 作者 相覚」、ラベル1(3 A / 67)・ラベル2(eik2-0-36)貼付。

右の書誌情報とくに奥書の記載から、さしあたり本書の成立事情について以下のことが確認できよう。まず、本書は応安五年（一三七二）十一月に二十一歳の真言僧相覚が醍醐寺（上醍醐）浄光坊において撰述したものである¹⁾。相覚大僧都（一三五〇～一三九二）は、久我通相の息で醍醐寺を拠点とする真言小野流の一つ地蔵院流に属した。嘉慶元年（一三八七）頃に鎌倉へ下り、明徳三年（一三九二）当地で没した『尊卑分脈』『常楽記』他。「太政大臣法眼や『宝蓮院』とも称した²⁾」。

次いで、真言僧聖通が二十歳の時に本書を伝領した。善乗院聖通（一三九六～一四二七）は、久我通宣猶子・今小路師冬息力。兄弟には三宝院満済がいる。血脈の類には見えないが、聖通も地蔵院流の僧侶であつた³⁾。なお、聖通の生没年から本書の伝領は応永二十三年（一四一六）のこととわかる。

本文について、相覚が書写した他の聖教との比較から、本文と相覚の奥書については相覚自筆とみてよい⁴⁾。一方、本書各冊冒頭にある目録の筆跡は本文とは明白に異なり、かつ聖通の伝領奥書と同筆と思しい（図3、4）⁵⁾。同じく他の聖通の筆跡との比較から、伝領奥書が聖通自筆であることが確認できる⁶⁾。すなわち、相覚が撰述した原本を聖通が伝領した際に、目録部分を書き加えたものが現状と考えられる⁷⁾。したがって、本書は南北朝期の応安五年（一三七二）に成立し、室町中期の応永二十三年（一四一六）に加筆された地蔵院流ゆかりの典籍と言えよう。

2 伝来について

藤井永観文庫には仏画・經典の優品が多数存在することで知られるが、典籍類では中世の真言密教に関する文献が多い。このうち主だったものは展示・図録にて紹介されている⁸⁾。さらに細かくみると、「野沢十二流」と呼ばれる真言密教の主要法流のうち、とくに醍醐寺を拠点とした三宝院流に関する鎌倉時代の書跡や聖教が目立つ。

まず建暦二年（一一二二）のものとされる「権僧正成賢書状」（[eiki-4-01](#)）は、醍醐寺座主・東寺長者を歴任し、三宝院流の根本聖教として知られる「薄双紙」を撰述するなど、聖俗にわたり醍醐寺に大きな足跡を遺した成賢（一一六二～一二三二）の消息である⁹⁾。

次いで、建長三年（一二五一）と推定される「深賢書状」（[eiki-4-03](#)）は、成賢の嫡

資道教から三宝院流の相承を預かり、これを道教弟の親快に授けた深賢法印（一一七九～一二六一）の消息で、彼は地蔵院の開基にして地蔵院流の祖とされる。そして、この地蔵院を継承した覚洞院僧正親快（一二一五～一二七六）が文永三年（一二二六）に著したものが「親快朱注偈項」（[eiki-1-13](#)）である。

このように、藤井永観文庫には三宝院流とその「嫡流」を称した地蔵院流に関する文献がまとまって伝来しているのである。この他にも、報恩院憲深（一一九二～一二六三）を祖とし、地蔵院と同じく三宝院流の「嫡流」を主張してゆく報恩院流関係者の著述として、正元元年（一二五九）に醍醐寺覚洞院で親尊が書写した「普賢延命鈔」（[eiki-0-01](#)）や岳西院祖の玄慶（？～一二九八）が伝領した「反音鈔」（[eiki-0-15](#)）などもみられる。このうち、「普賢延命鈔」の紙背文書には複数の憲深書状が確認されている¹⁰⁾。

藤井永観文庫に限らず、現在は個人蔵や機関所蔵となっている中世の真言密教関係の文献には、醍醐寺関係とくに地蔵院流についてまとまった形で伝来している場合がある（前田尊経閣所蔵「宝菩提院文書」・国立歴史民俗博物館所蔵「田中穰旧蔵典籍文書」など）。これらは三密蔵（宝菩提院）や金剛蔵（観智院）など、東寺の諸経蔵に伝来した聖教類と密接な関わりが想定される。撰者・伝領者がともに醍醐寺地蔵院の関係者であることを踏まえるならば、帙の題箋に「東寺本」とあることも併せて東寺周辺からの伝来が推測されよう。もともと、文庫主の藤井孝昭氏が個別に蒐集したものか、何らかの形でまとまって収蔵されたことになったのか、その経緯は現状では詳らかではない。ここでは、本書が藤井永観文庫内の孤本ではなく、醍醐寺および醍醐寺地蔵院に関する一群の「まとまり」として伝来した可能性を指摘するに留めた

3 構成と特徴

本書の構成は各冊冒頭の目録に示されているが、目録の表記と本文内の見出し表記が異なる部分や、目録では抜けている項目がある。そこで、以下に異同を含め掲出しておく。異同がある場合、【】内が本文内の見出し表記である。

〔上冊〕

両部曼荼羅事／阿弥陀法事【阿弥陀事】／藥師法事【藥師事】／光明真言事
付土砂加持【土砂事】／仏眼法事【仏眼事】／舍利法事【舍利事】／後七日事／
大仏頂法事【大仏頂事】／尊勝法事【尊勝仏頂事】／如寶尊勝事／一字金輪事
／法花法事【法花事】／【理趣經事】／六字經事／咒賊經事／壽命經事／童子
經事／【止風雨經事】／請雨經事／孔雀經事／任（マ）經事【仁王經事】／六觀
音事【正觀音事・千手事・馬頭事・十一面事・准胝事・如意輪事】／不空羂索法事
【不空羂索事】／阿摩提法事【阿摩提事】／五字文殊事／八字文殊事／五秘密
法事【五秘密事】／虚空藏法事【虚空藏事】／普賢法事【普賢事】／延命法事【延
命事】／普賢延命法事【普賢延命事】／【千手四十手中無延命法事】

〔下冊〕

地藏事／弥勒事／随求事／【勢至事】／不動（付八千枚事）【不動事】（八千枚事）
／降三世事／軍荼利事／大井得事【大威德事】／金剛藥叉事／愛染王事／烏
鵲沙摩事／金剛童子事／北斗法事【北斗事】／属星事／炎魔天事／常求利事
【常求利童女事】／十二天事／聖天事／施餓鬼事／地天事／水天事／多聞天
事／吉祥天事／求聞持事／雜々事【結緣灌頂事】／除目御修法事【大師即身
成佛事】（二仏二中年教事）／心額唯頂四處事【惠果二人事】／比丘僧不可
礼敬神明只可行法施事【仏智止万字事】／【月中菟事】（墨消）五欲
事【声聞事】／縁覺事【乳木事】／後夜闕伽水汲時分事【上堂時至道場門
畔唱テ彈指スル事】（三古印）字事【勸請并發願神分表白等事】／結印時霞
衣事【百心木事】／菖豆事【双六梵名事】／轉法輪事【不動頂上蓮花事】

右に明らかなように、本書は下冊末尾の「雑々事」を除くと、密教僧が師から伝授
する修法いわゆる「諸尊法」に関する聖教と言える。あるいは先師の口伝・口決から、
あるいは「覚禪抄」や「秘鈔」といった口決集から、あるいは経疏・儀軌などの注釈書か
ら、それぞれ引用する形で各修法の由来や作法を説明している。

こうした構成から直ちに想起されるのは、頼瑠撰「薄草子口決」（成賢撰「薄双紙」
について憲深の口伝・口決を頼瑠が編纂した抄物。弘長二年（一二六二）撰）をはじめ
とする、諸尊法を類聚し解説した「抄物」である¹¹⁾。実際、本書の項目の多くは「薄双
紙」に収録される諸尊法に含まれる。ただし、本書の場合は数行に満たない簡潔な項
目もあり、伝授に関する情報を詳細に記し全数十巻に及ぶ¹²⁾ともある抄物の類とは

性格が異なる。下冊奥書に「自他流之古口決抄等開見、小々令鈔出者也」とあるよ
うに、諸尊法に関して広く諸説を渉獵し、その要諦を端的に記した覚書の類と言え
ようか。言わば「抄物の抄物」といふべきもので、なるほど「古口決抄鈔出」という書名
は本書の内容をよく言い表している¹²⁾。

もともと、本書の随所にみられる「或記云」という部分に注目すると、たとえば光
明真言事（上冊五丁才）の「或記云、既五智如来頂ヨリ各放光云々、是即順五色光印
ニ、又会台藏五古印ニ、故以台大目為本尊也」という一節は「薄草子口決」からの引用
とわかる¹³⁾。「自他流」と言いながらも、参照の対象が主に三寶院流の所説にあつたこ
とは疑いない。

こうした特徴を持つ本書が真言教学上どのような意義を有するのか、その方面に
疎い筆者には理解が及ばないが、本書が撰述された応安五年（一三七二）は、相覚が
伝法灌頂を受け阿闍梨となつた年であり¹⁴⁾、また二十一歳という年齢からしても（聖
通の伝領も二十歳である）、その修学上の初習段階におけるテキストと位置付けるこ
とは許されよう。

おわりに

以上、簡略ながら本書について基礎的な情報を整理した。密教僧として学ぶべき修
法等の次第を簡潔に「鈔出」した本書は、初学者の手引き的な用途が想定される。そ
の意味で、一見には没歴史的・没個性的なテキストにみえるが、果たしてそうだろう
か。別稿では、本書の撰述・伝領の時期や撰者・伝領者の立場について検討し、醍醐寺
「地藏院」とその法流をめぐる歴史的展開に本書を位置付けたい。

〔謝辞〕

「古口決抄鈔出」の原本調査にあたり、御高配を賜りましたアート・リサーチセンタ
ーの関係各位に厚く御礼申し上げます。

〔注〕

1) 浄光坊は山上に在つた房舎の一つで、『醍醐寺新要録』巻第五によると、永久五
年（一一三〇）の「祈雨御記」に「上醍醐浄光坊」との所見があるという。また、

『醍醐寺文書聖教』中には堂舎の相承に関する手継証文をはじめ多くの所見があり、中世を通じて浄光坊が存続していたことがわかる。

相覚についての専論はないが、醍醐寺地蔵院に関する諸研究で触れられている。石田浩子「室町期における「都鄙」間交流」『人民の歴史学』一八二、二〇〇九年）、後掲注3伴瀨論文など。本書と相覚の関係については別稿にて詳しく検討する。

3 伴瀨明美「室町期の醍醐寺地蔵院―善乗院聖通の生涯を通じて」『東京大学史料編纂所研究紀要』二六、二〇一六年）。なお、聖通と本書の関係についても別稿にて詳しく検討する。

4 たとえば『東寺観智院金剛藏聖教』又別五〇函四二号「八千枚」の奥書部分「応安四年六月廿八日以師主御本書写了、相覚（二十）、同又別四四函七八号「修学士代」の奥書部分「永和五年二月十五日一見之次書写了之、欣求西土沙門相覚（生廿八）」などを見ると、署名の「覚」や「五・年」といった文字に特徴的な共通点が見られる。

5 とくに「聖」や「金」の字などに顕著である。

6 「僧正聖通書状」『大日本古文書 醍醐寺文書 別集之一』二一四号～二一六号。同書九三頁に一部影印あり。

7 朱合点および朱筆の追記については記主を判別し難い。

8 『財団法人藤井永観文庫展 中世の密教世界』（立命館大学 21世紀COEプログラム 京都アート・エンタテインメント創成研究、二〇〇三年）、『財団法人藤井永観文庫展 中世の聖教と紙背』（立命館大学 21世紀COEプログラム 京都アート・エンタテインメント創成研究、二〇〇四年）、『学校法人立命館所蔵 藤井永観文庫の優品』（細見美術館、二〇〇六年）

9 成賢とその著作については、西弥生「遍智院成賢と三寶院流」『中世密教寺院と修法』勉誠出版、二〇〇八年、初出二〇〇四年）、永村眞「遍智院成賢の教説と聖教」『中世醍醐寺の仏法と院家』（吉川弘文館、二〇二〇年、初出二〇一一年）を参照。

10 牧野和夫「深賢所持八帖本と延慶本『平家物語』をめぐる共通環境の一端について」（水原一編『延慶本平家物語考証』、新典社、一九九二年）。

11 三寶院流の抄物については、前掲註9西弥生・永村眞論文に詳しい。

12 なお、「虚空蔵事」の末尾（上冊三十七丁ウ）には、朱筆で「求聞持事、可有此所二也、下巻奥三記之」とある。このように、何らかの配列・順序を前提とした追記が本書中にまみえられる。目録を見る限り、概ね「薄草子口決」『大正新修大藏経』第七九卷所収本を参照した）の収録順に沿っているが、追記を反映したとしても完全な一致ではない。

13 『大正新修大藏経』第七九卷一八二頁。
14 「伝法灌頂記」『大日本史料』六編之三六、一九〇頁。

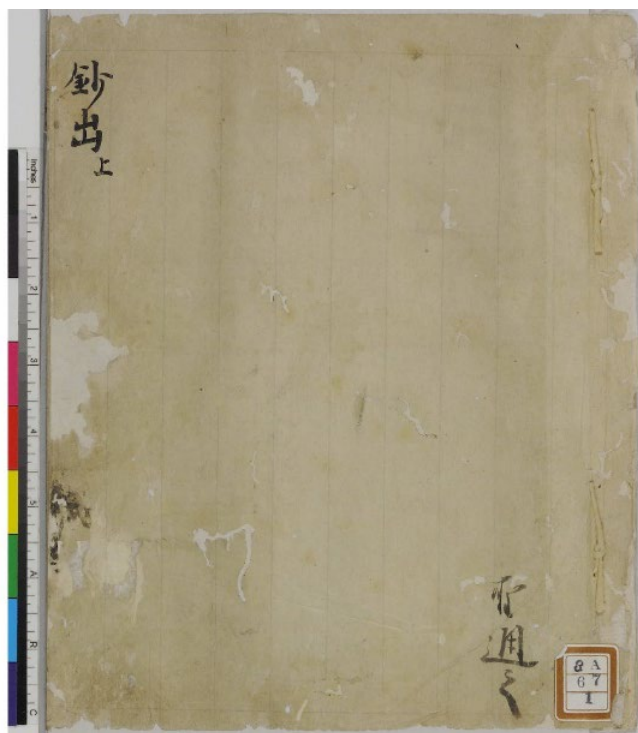


図1 上冊 表紙

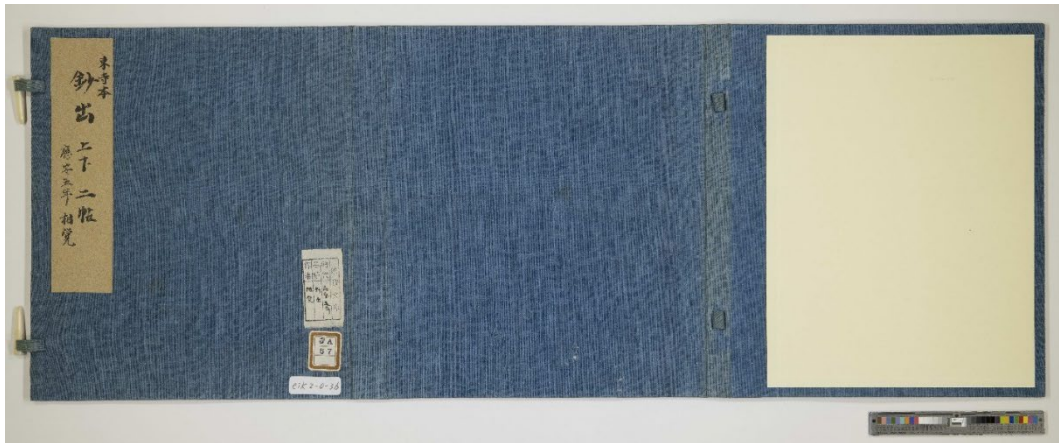


図2(eik2-0-36)

本書を収納する帙

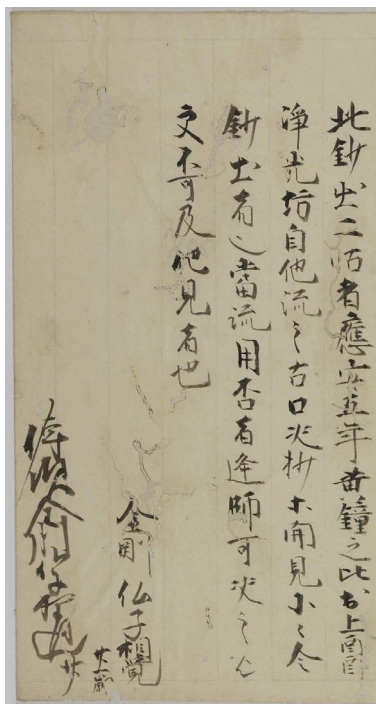


図3 下冊奥書

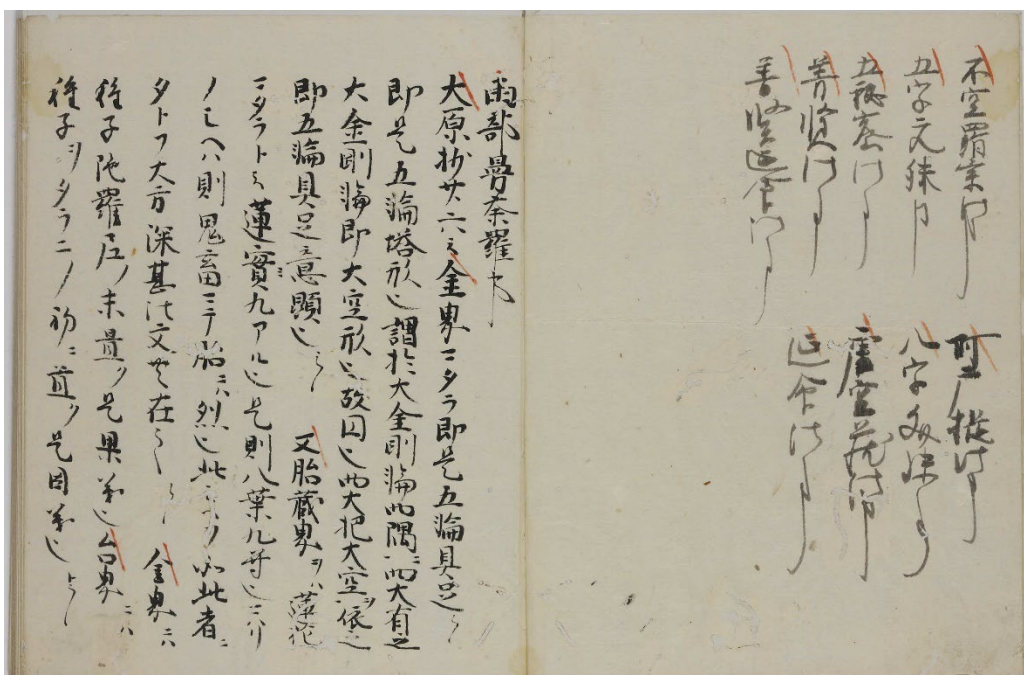


図4 目録と本文